

町民文芸



只見短歌会

一月詠草

大塚栄一 指導

小倉キミ子

片付かぬ事の重なり晴れぬ日は箇条書きにし眺めて過ごす

古川 英子

新年の挨拶交し診察を待つ人群中に酒の匂ひす

関谷登美子

他の土地で元日迎ふる娘をれば心にとめて初詣する

渡部ゆき子

寒波来る予報に凍餅作らんと米を浸して道具を揃ふ

馬場 八智

時期早きどか雪降りて若杉の折れし傷跡日にさらさるる

目黒 富子

屋根の雪下ろすと夫の上がりしを確かめ姿の見ゆる場に立つ

五十嵐夏美

寄宿舎に又一人友の入りしと電話に息子の声は明るし

渡部ヨリ子

作業場の軒に下げおく正月の飾りの稲穂を雀ら啄む

新国 洋子

二百枚も印刷すれど出せぬまま届きし賀状を病床に読む

(出 詠 順)

只見俳句会

二月例会

目黒十一 指導

礼

中空にふわりと寒し昼の月
凍餅の晒されてゆく白さかな

信

枯銀杏変らずありし学生街
寒晴やゲレンデスキーゆつくりと

修 一

冬空の雲間の日ざし足を射る
生き方に覚悟をせむとシクラメン

一 灯

目に見えぬ埃を撫でて拭始
凍て川や橋復興の足場組む

藤 彦

友来る豆腐煮詰まる夜半の冬
宵深し話の尽きぬおでん酒

又 壱 歩

子が親になれて嬉しき春の朝
歳一つ重ね賀状のへりにけり

恒 夫

屋根裏の雪の重みや火伏神
打豆を打つや大屋根雪崩るるよ

吉 児

熊汁の出店今年は見ず終い
赤腹の鮭漬封切る女正月

隆 堂

浅草山咽ぶがごとく雪しまく
声あげて軒巡りゆく寒雀

邦 男

立春や端縫い袋に母の影
雪祭り雪の香りのにしん漬

邦 夫

逝く妹よ大雪なれどよく眠れ
かまくらや点す会津の絵ろうそく

康 女

ゆきずりのマスクの上の目が笑う
かくし芸のりんごの皮の長きこと

リウコ

冬籠羊羹を練る甘味加減
寒晴や客来る準備整えて

都

歌留多取る幼き子等と爺と婆
目をつむり初髪之母九十五

一 穂

六歳の火の用心や初座敷
集う顔みなほころびて寒の飴

洋 子

吹雪かれて鰻絵の鶴の丹色かな
雪の日や雪飲み込んで荒れし川